

EVENT

交錯して、突き抜けるもの 藤原安紀子

「現代詩を浄瑠璃で語る」

どうも最近コラボレーションという単語をよく耳にする。しすぎる気がしているので略語のコラボなどは見聞きするだけで不愉快なのだが、殊に創作に係わる身ならば便宜上の問題だけで安易に合致していいのだろうか、いいわけではないと私は思う。が反面、互いを累乗するかに広く大きな展開をみせる共同製作はあるものであり、その試みが為された空間は戦くばかりのものであった。

「現代詩」を「浄瑠璃で語る」という、しかも会場となる場所は「能楽堂」らしい、と聞けば大いに惹かれたので照りつける日差しも厳しい晩夏の日曜日、閑散としたオフィス街の一角にある山本能楽堂へと足を運ぶ。板張



りの廊下を素足で進み引戸を開けて入場すると、能舞台を囲むようにして広がる座敷。座布田の場所により席が指定されていて、舞台と客席がとても近い。絛毛氈が敷かれた舞台上には壮麗な能装束と道具が飾られてあり、観客は入口で配布された「現代詩詞章・浄瑠璃床本」とある冊子を捲りながら開演を待っていた。ほどなくして脇から足袋を履いた出演者たちが現れる。

文楽太夫の豊竹英太夫、詩人建島哲とスベシャルゲストの高橋睦郎、この催しの企画者であり現代美術家の伴野久美子。四人が丸椅子に腰掛けて並び、伴野の司会進行により「現代詩と古典芸能のあやしい関係」と題されたトークが始まる。そもそもこの浄瑠璃と

現代詩のコラボレーション、朗読をあまり得意としない建島が旧友である英太夫に作曲演奏を依頼したのがこの起りだという。九六年の慶応大学でのイベントが初の試みで、今回、十年越しの再演が叶ったというわけだ。

演目の初めは建島哲「パトリック世紀」。まず詩人本人の朗読があり、追って浄瑠璃語りが始まるという構成である。肉声が詩の言葉の中を攪拌するように練り歩いて行く。同

じく「緑の劇場」へと続き、聴いている私はいつのまにか英太夫の声の深く長い一音の間に立ち止まり、見渡すようにしていた。文字から呼び起こされた声と言葉のイメージへの回路は、こんなにも彩り豊かなのかと感嘆する。続いて高橋睦郎「ぼくは お母さん」。

高橋自身の朗読により、音声化された言葉が静かに身体内部へ降り積もっていく心地よさに暫したゆたった後、英太夫が作品に描かれた三人の母のうち土方架の母スガのくんだりを浄瑠璃で語ることとなる。竹澤団吾の奏でる三味線の音色がさらに繊細に心の機微を炙りだしていく。

人形遣いの居ない、太夫と三味線だけで構成された舞台を「素浄瑠璃」といい、まさに聴覚だけで物語世界を表現する究極の語り物芸術と賞される。すべての登場人物を語り分け、光景や状況までも明らかにする太夫の声。その浄瑠璃が、熱心に読み込んでも光景も状況も登場人物も昏いままの現代詩から、一体何を明るくみへと導いたのか。そんなことを考えついても余韻を離れないが、少なくとも私には多重の声が響く帯域へ、身体ごと傾いていく感覚があった。詩作品の深層にうごめいている言葉なのか声なのか、触れていたそれを示そうとして思考する。あらゆる記号の暴力と争いながらも、あの舞台空間に生じた、ほそい線上的ものが知覚を貫通していったことは確かである。